

現代農民女性の信条と家族観

農業総合研究所 相川良彦

一、はじめに

現代の農民女性は、何に苦しみ、どんな信条をもつて暮らしているのだろうか。本報告では、昭和五八年度毎日農業記録賞で県入選を果した女性作品の内、四六点を素材として、次の三点を明らかにする。(1)現代農民女性の人生コースの標準型および記述内容による類型を提示する。(2)農民女性がぶつかる幾つかの人生上の苦難について、因果関係を整理する。

そして、その際、彼女を支えたものが何であつたかに言及する。(3)人生上の諸局面において農民女性が抱く家族観とは、如何なる心情と論理で充たされたものであるかを、作品自体の文章紹介により浮きぼりにする。

二、人生コース

(一) 人生コースの標準型

人生上の主要な出来事一二項目と価値観三項目を、農民女性が取り上げた割合及びその肯定・否定度合について眺めてみる。

(1) 結婚しない就農：一部に嫁ぐことへの躊躇、就農への不安が語られている、(2)農作業・経済生活の厳しさ：大半の者が苦しみと受け取り、その克服の為に、三分の一の者が農業技術の習得、三分の一

の者は農業経営改善に向けての様々な努力を綴っている。他に、兼業に出る農家も一部に現われる。(イ)家族問題・家旅関係への評価は賛否相半ばする。否定の中身には、親世代との確執が多い。(二)子供のしつけ・農業・農村をしつけに良いと肯定討議する者が多い。(二)農業観、家族観、人生観：作品を、これら抽象的観念で肯定的に結ぶことが一般的である。

(二) 人生コースの類型

女性個人の行動を語る九項目について、記述されているか否かをデータとして、統計手法により類型化を試みる。

(イ)累積寄与率の低さは、作品が多彩なため、あまり画一的な要約にはなじまぬことを示唆する。(二)抽出された共通軸から、作品は、経済活動中心に繰られ家族に触れないもの(又はその逆)、當農活動中心に繰られているが農業技術面の記述の脱けているもの(又はその逆)、結婚や家族員間の役割移譲の側面に重点をおくもの、等に分類しうる。

三、苦難の因果関係とその際の支え

結婚・就農した女性がぶつかる苦難の一般的形態は次の三種である。(イ)農業の辛さをもたらす原因として、第一に當農上の諸条件、第二に事故・病気、第三に技術未熟を挙げうる。苦難の末の結果については、ことさら言及しない者の多いという特徴を指摘しうる。(二)経済生活の苦境をもたらす原因として、第一に経済諸条件、第二に経済情勢・時代、第三に天災・自然条件を挙げうる。苦境は、農業経営の改善・近代化により乗り越えたとする者が多かつた。(三)家庭問題の悩みの種は、第一に家族労力不足又は家族関係のまささ、

第二に農家・村落の封建性・保守性、第三に事故・病気、である。家族問題の解決は、ただ抽象的に「克服・忍耐」により記述されることが多い、という特徴がある。

次に、苦難に際して何が支えとなつたかを見てみると、まず、苦難三形態に共通するのは、約三分の一の女性が特に支えを記述していないことである。次に、記述された支えの中では、「家族」が圧倒的に多い(三形態計で三〇%)。特に、家族問題の悩みにその割合が高い(五〇%)。女性にとって、家族の紐こそが支えなのである。ついで高いのが、技能(四%)、努力(八%)という個人の能力・姿勢にかかる項目である。「制度、農業団体等」や「仲間、親類、地域社会」は概して頼りにならない存在なのである。

四、人生の諸局面にみる家族観

(1)結婚又は就農：青壯年や非農家出身者が手記に取り上げる割合が高く、評価も肯定的な面に対し、兼業農家の主婦は否定的な者が多い。

(2)農作業：とりわけ非農家出身者が、辛さを強調する。ところで、農業の辛さは、単に技能未熟や肉体的弱少さによるものではなく、親や夫の意のままに働くことと増巾されるものである。経済生活・兼業農家は経済生活の苦しさをあまり取り上げない、特に、経済的苦境がひどい場合、農家家庭は協力して経済建て直しを図ることになり、家族への献身も生まれる。献身は伝統的な家を構成する心情の基礎と一脈通じるものがある。

(3)職業としての農業観：非農家出身者は職業としての農業を自負する者が多い。職業としての農業は家業とは異質と自覚されているが、

一部に親子の愛情・家産の継承と混然一体的に受けとめられている例もある。

〔4〕嫁一姑、役割移譲・親子世代間の確執は、財政権の掌握・移譲という形態で現われることも多く、嫁の立場からそれを封建性打破!!近代化と位置づけている者も多い。